

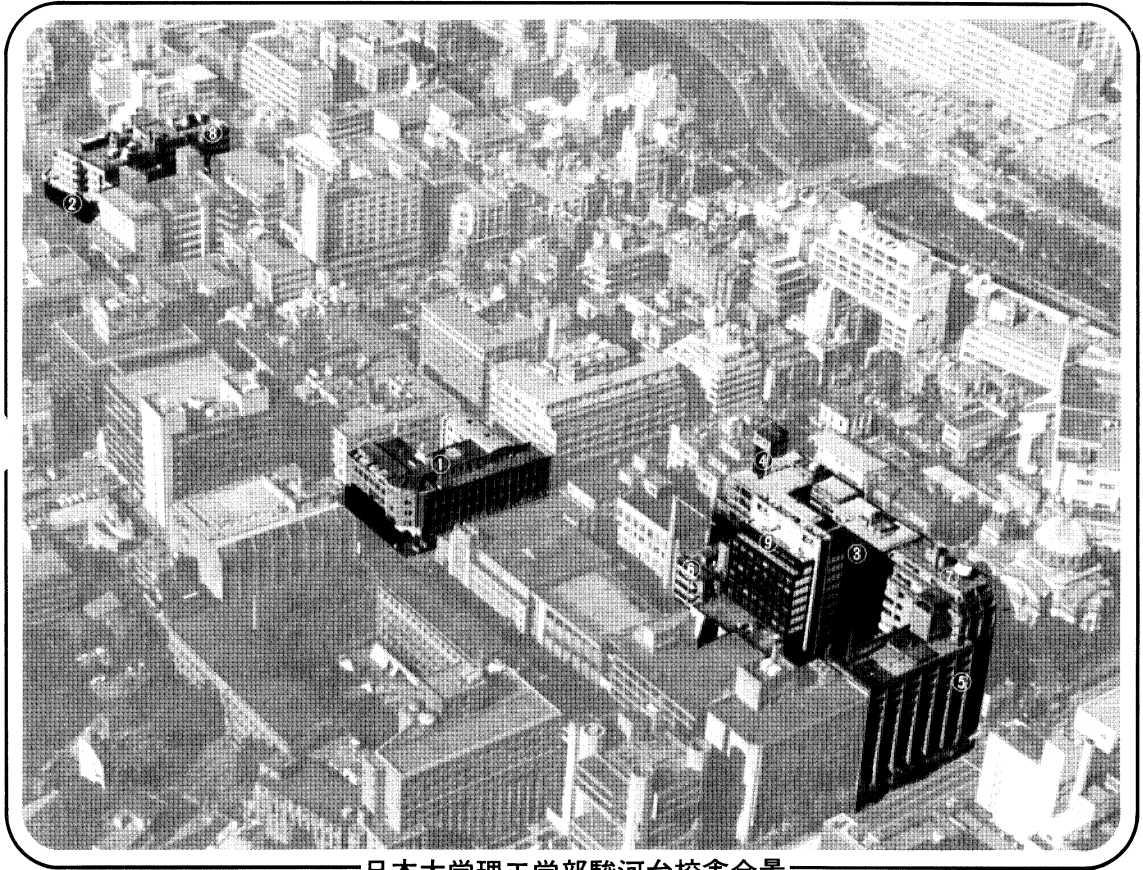
会誌目次

# 桜工

日本大学工科校友会

No. 59 1978

「巻頭言」……………会長挨拶……………豊永権二…………… 2  
 なぜ人力飛行機を創るのか……………木村秀政…………… 2  
 古田重二良先生銅像除幕式に参列して…中山 隆…………… 3  
 大学広報委員会報告……………近江 栄…………… 4  
 「特集」……………学生時代の思い出……………(1)~(7)…………… 4  
 部会だより……………土木・建築・電気・化学・薬学・物理・数学…………… 9  
 地方支部だより……………9 道県支部…………… 12  
 職域支部だより……………4 支部…………… 16  
 本会記事……………事務局…………… 18  
 正会員(終身会費)52年度納入者……………事務局…………… 20  
 地方支部、職域支部名……………事務局…………… 22  
 日本大学工科の歌…………… 24



日本大学理工学部駿河台校舎全景

1号館 事務局、講堂、食堂    2・8号館 工業化学・薬学    3・4号館 研究室    6号館 図書室、製図室  
 5号館 研究室、製図室、食堂    7号館 講堂、サークル室、食堂    9号館 大学院、研究室、講堂、購売店



## 御挨拶

日本大学工科校友会  
会長 豊永権二

昭和52年4月工科校友会相談役瀬古新助氏は勲三等瑞宝章に叙せられ又同松島俊之氏は

勲三等旭日中綬章に叙せられました。共に御専門の分野での積年の御努力と斯界に貢献された御功績に対する叙勲でありまして、深く敬意を表すると共に御祝詞を申し上げます。7月29日加藤理工学部長、外木工学部長、佐賀常任理事をはじめ多数の発起人による両相談役に対する叙勲祝賀会が芝公園内東京プリンスホテルに於て盛大に挙行されました。

又9月23日より26日まで校友会中華民国台湾支部結成のため校友会静岡支部が主体となって同支部松井訪台団長の要請によって高梨副総長、加藤理工学部長が顧問として御出席になり校友会副会長及工科校友会々長として私が随行いたしました。

9月23日盛大なる歓迎をうけ夕刻より台北国賓飯店に於て交歓会が開催されました。台湾には約壹千名の校友が居られ当日あいにく台風の影響ですさまじい荒天になり、そのために過半数の方々が欠席になりましたが50名の校友が出席されて久々に旧交を温めました。翌24日には、林錫池工科校友会支部長の御招待をうけて此の席上はるばる支部結成に訪台された事について中華民国々民として誠に暖かい友情を感じたと深甚なる謝意を表せられました。

越えて10月28日には古田重二良会頭の銅像の除幕式が福島県郡山市日本大学工学部校庭に於て挙行され工学部創設30周年祝賀会が引き続いて29日に厳粛に開催されました。今回の銅像建設に際してその基金の一部として工科校友会より金壹百万円を寄附いたしましたので古田重二良銅像建設実行委員会外木委員長より感謝状を授与されましたのでここに謹んで御報告申し上げます。

因に古田重二良会頭は終戦後直に海軍航空隊跡地11万余坪を政府に要請学園用地として獲得され、工学部を創設、今日まで30年間に亘り学園の整備充実に傾倒され隆盛なる現在の工学部の基礎を築かれ、「ケンブリッジ」及「オックスフォード」大学をしのごまでに力をつくされ又学園都市として郡山市を発展せしめられたその先見の明とその御功績は年を経るに従って益々輝きを増す大事業でありまして我国教育界に対する古田会頭の御貢献は戦前戦后を通じて特筆すべきものであります。

さて昨年は我国産業界にとりまして誠に衝撃をうけた年でありました。結果的にはオイルショック後の物価高、失業、そして国際収支の悪化と云う三重苦に悩む世界諸国の仲間入りをせざるを得ない事になって今年以降暫くの間はこの事態から抜けられないと覚悟しなければならないでありましょう。

世界的不況である以上各国民族の優劣とこの苦難をうけて立つ気概の有無にかゝって所謂「6年目の危機」を乗り切れるか否かだと思います。我々技術者を含めて吾国の産業人は此の事態に際して新たな広い視野に立って対処して行かなくてはならないと存じます。

何物にもまして健康が大切であります。恩師先生、先輩、校友諸氏の御健康を御祈りいたし併せて御健斗を祈念いたします。



台北国賓飯店

## なぜ人力飛行機を創るのか

日本大学名誉教授 木村秀政

日本大学で十数年も前から、航空専修コース学生の卒業研究のテーマとして人力飛行機の試作をとり上げ、研究成果をだんだん積上げて、1977年1月2日には、ついに直線距離2094mの世界記録を樹立したことは、今や世界中に知れ渡って、世界各国からファンレターや問合わせの手紙が舞いこんでくる。過日ロンドンで開かれた王立航空学会の席上でも、日本人として唯一人出席した私は、多くの熱心家に取囲まれ、質問攻め、サイン攻めに合った。その中で、アメリカの人力飛行機研究の第一人者、マクレディ博士がこんなことをいった。

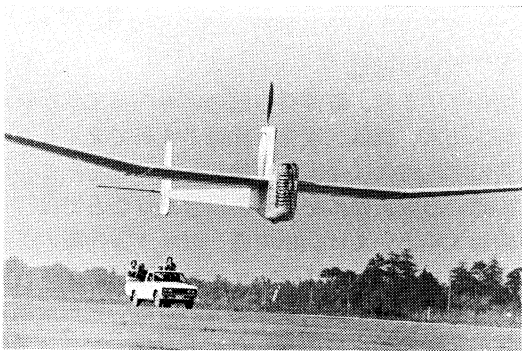
『毎年人力飛行機の研究をして卒業する学生が十数名いるとのことだが、直接人力飛行機に係る職場に就職するものは1人もないでしょう』——もちろんその通りである。

もともと人力飛行機というものは、たった0.3～0.4馬力という僅かな人間のパワーだけに頼って、

外力の助けも借りず、上昇気流の恩恵も避けて、全く独力で空を飛ばうというわけだから、現在のところ性能も貧弱で、これに乗って自由に空の散歩を楽しむというわけにはいかない。人間の馬力の不足を補うために、翼を通った気流が地面にぶつかって角度を変え、それで誘導抗力が減るといふ地面効果が必要なので、飛行高度はせいぜい2~3mである。それでも、十分訓練したパイロットでも5分間も飛ばばくたになる。空の自転車として、実用的な乗物になるのは、まだまだ先のことになるだろう。

しかし、その反面、技術的に見ると、ひじょうに興味のあるテーマである。どうしたら飛ぶために必要な馬力を最小限度まで低減できるか。それには機の構造重量を減らすことと、機の揚抗比(抵抗に対する揚力の比)を高めることを局限まで追求しなければならない。尋常のやり方では、世界記録どころか、地面を離れることさえできないのである。

こういう技術的に難かしく、しかも夢のあるテーマを与えられると、彼等ははりきって、これにぶつかってゆく。1グラムでも機体重量を減らすために、文字通り骨身を削る思いで仕事に取り組む。油が乗ってくると、はたで見る者を驚かすほどの苦しい仕事の連続もいとわない。それだけに、遂に完成して見事に地面を離れたときの感激は、彼等にとって初めての経験であろう。仲間と協力して難関を乗りきった満足感と幸福感。これは長く彼等の胸に残って、人生行路の大きな指針となるだろう。こういう教育効果こそ、私が人力飛行機を学生の卒業研究テーマに取上げる狙いなのである。



## 古田重二良先生銅像除幕式に参列して

事業委員長 中山 隆

東北屈指の工業都市、福島県郡山市の一角、阿武隈川の清流のほとり、はるかに吾妻・盤梯・安達太良の名峰を望む絶景の地に我が理工学部の分身日本大学工学部は毅然と立っている。

清流沿ひに桜並木に導かれて、程なく構内である。

アカシヤの林や古杉の森に囲まれ、小鳥の群れ遊ぶすばらしい環境である。周囲には無限の拡張の余裕のある39万平方メートルの地に、自然と学究心が湧き出て来るような清麗な校舎の棟々、その建築総面積63,880㎡に及ぶと云う。

又ハンドボールコート・テニスコート・野球場・ラグビー、サッカー場・運動場・50m公認プール・弓道場・グライダー格納庫及び武道館等々の体育並にリクレーション施設の完備した日本大学の誇り得る工学部である。

北は北海道、南は沖縄に亘る全国から集っている在学生5,300名、そして卒業生は地元東北地方は勿論京浜、中京地区を主に全国的に総合大学の利点を最大限に発揮して各官公庁や各地域の民間企業で大活躍である。ご同慶の至りである。しかし駿河台の旧制専門部工科をここに移転したのは、丁度30年前の昭和22年のこと、終戦直後の人心不安定な極度の混乱時代であった。当時敗戦日本の再建には若きエンジニアの育成は急務であるとの信念と、建学の精神に沿って決行された当時の幹部諸先生の英断に深い敬意を表したいと思う。中でも当時工学部(現理工学部)の事務長であられた故古田重二良先生は移転計画の先頭にたたれ、土地の接收交渉にあらゆる関係機関を説き廻り、この旧海軍航空隊用地を無償獲得されたものである。鈴木総長先生が祝辞でも古田先生の確固たる信念と卓越した実行力のおかげではじめて成し得たものであると万くうの敬意を表されている。雑草が生い茂っていた敷地の、しかも爆撃され廃墟のような兵舎で発足した工学部を現在の姿に変えるのに心血をそそがれた古田先生と、苦勞を共にされた歴代工学部長他の諸先生・学生諸君とその父兄、全面的に協力後援された歴代の福島県知事・郡山市長他の方々の感概や察するに余りあるものがあります。

工学部30周年記念式典の関連行事として昭和52年10月28日古田重二良銅像除幕式が先生の未亡人、ご長男、ご令孫をお迎えし大勢の関係者が参列して盛大且つ厳粛に取り行なわれた。これは工学部校友会が主体となり教職員、父兄が一致協力して本部役員理解のもと各学部の協賛を得て、工学部産みの親育ての親である故古田重二良先生の功績を顕彰せんと建立したものである。工学部校友諸学兄のこの快挙に対し敬意を表すると共に賛辞を送りたい。

前述のように自らつくり自分で育てあげたと云って過言でない。工学部の校庭に校舎に向って立つ満足そうな故古田会頭の英姿は更に伸びゆく有様を永久に見つづけることであろう。

尚除幕式に際し銅像建立実行委員長の外木工学部

◎「桜工」会誌委員

委員長 伊藤 和雄 (化学)  
委員 黒瀬 元雄 (機械)  
委員 河村 陽男 (電気)  
委員 小池 昭一 (建築)

委員 下青木秀吉 (土木)  
委員 木村 元己 (土木)  
委員 山田 翠 (化学)

委員 松井 嘉孝 (建築)  
委員 山内 盛 (薬学)  
委員 平 栄 (薬学)

編 集 後 記

年々オ々花変らず、今年も新会員を迎える季節になりました。59号をおとどけします。皆様のご協力のおかげで、原稿が予定以上集まりました。全部を限られた頁に納めるよう、委員一同うれしい苦勞を味わいました。読みづらい所もあるかと存じますがどうかご勘弁下さい。次号はもっと充実した内容にしたいと念じています。皆様の一層のご援助、ご助言を切に期待します。 I.K.

# 日本大学工科の歌

## (若きエンジニアの歌)

堀内敬三 作詞  
作曲

Marciale. (♩ = 114)

1. 昭 煥 の 日 出 づ る く に こ う わ が そ こ くり 其  
2. 青 春 の に ゆ め あり り を ちゅ こう そに し ん た そり あ く りか  
3. 永 遠 の ひ か あり を げ ん せ に あ た う べ く か

の 名 お ば に な い て そ び ゆ 我 が ほ こ れ う 伸 び  
ん じ り な と き ほ り そ う し と む す い の こ こ ろ も ら て 科 が  
ぎ り な き ほ う し と む す い の こ こ ろ も ら て 科 が

(b) 行 く く に ほ ん の ち か ら は こ こ に 地 を  
く の に ち さ ち あ と る ふ かく ら つい の 意 こ 志 に を 武  
た の に さ ち あ と る ふ かく ら つい の 意 こ 志 に を 武  
た の に さ ち あ と る ふ かく ら つい の 意 こ 志 に を 武

ひ ら き ゆ く も の わ か き エ ン ジ ニ ア  
と う し て は す すす え ま あ り り ー ー ー ー ー ー ー ー

昭和53年 3月10日発行 ©編集兼発行者 伊藤和雄 ©印刷 光星印刷株式会社  
©日本大学工科校友会発行 東京都千代田区神田駿河台1丁目8番地  
電話 東京293-3251内線206 振替 東京3-162710